

## ➤川端 祥樹

題目：“自我体験を生きる”というあり方に関する心理臨床学的研究

要約：自我体験とは、「私はなぜ私なのか」、「私はどこから来たのだろうか」といった水準の「私」への問いである。本研究は、自我体験と名づけられるような体験をしていると思われる前思春期頃の子どもが生きている世界とはどのようなものなのかを詳細に描き出すことを目的とした事例研究である。面接過程において、創造神話を思わせるようなイメージが表現された事例を提示し、その過程で発せられる問いを、セラピストがクライアントの存在論的・根源的なこととして感受し、体験することによる治癒の可能性について考察を行った。また、自我体験が体験されることが多いとされる前思春期の対人関係の特徴として、チャムシップに着目した。チャムシップはこれまで、自我体験という心の深奥にふれるような個の極みの体験によって生じ得る恐怖や孤独を不問にするかのように振る舞うことで、内的な危機を目に見えない形で抱え、守るような機能があるのではないかとわれてきた。しかし、言葉にせずとも同じ体験をしていると感じさせる他者の存在は、むしろ自我体験を生きるという能動的なあり方を促進するものにもなり得るのではないかと考え、そのような観点から考察を試みた。

結果、心理療法の過程において発せられる様々な問いを、自我体験的問いとして感受するためには、問いそのものに注目するだけでなく、問いが浮かんでくるまでの過程や、その後の展開なども含めた視点である、「自我体験を生きる」という視点を持つことが意義のあることだと考えられた。また、チャムシップという観点からは、言葉にせずとも同質の問いに取り組んでいるという感覚として共有されることによって、双方にとって自我体験的問いに開かれやすく、またそのような問いをどちらかが取り組むのではなく、二人のものとして引き受けることが可能になるのではないかと推察された。

## ➤平塚 裕美

題目：女性の仕事と子育ての両立認識に関する研究—シングルマザーへのインタビューを通して—

要約：本研究の目的は、性別役割分業意識が強い日本において、さらに家事や育児の大半を担っているシングルマザーを取り上げ、シングルマザーの子育てを含む経験についてこれまでの研究では見えなかった現実を明らかにすることである。次に、シングルマザーが

満足して子育てを両立するために何が必要であるか知見を得ることを目的とした。本研究では、6名のシングルマザー女性に半構造化面接によるインタビューを行い、質的研究法の1つであるSCAT法（大谷2008, 2011）を用いて分析を行った。その結果、「ソーシャルサポート」、「社会との繋がり」、「行政のサポートを受ける知識」、「無条件の子育てへの関心」、「過剰適応」、「非常勤での働きにくさ」、「日本女性に生まれた不利益感」の7つの共通する構成概念が抽出された。そして、理論記述を試みたところ、シングルマザー女性自身が持つ性別役割分業意識の高さから、仕事や子育てにおいて過剰適応状態となり、しんどさや生きづらさの原因になっている可能性が示唆された。

➤森福 直哉

題目：「中小企業でのストレスマネジメント教育の確立にむけて」－ユーストレス要因を活用して運営される小集団の成長可能性－

要約：中小企業でのストレスマネジメント教育を実践する視点から中小企業の働きやすさの特定を行うため、2つの仮説を設定し、107問のアンケート調査を行った。仮説1として「企業規模により裁量度が変化するためストレス反応に影響がでる」、仮説2として「職務要求と裁量度などストレス反応にかかわる働き方の組合せがあるのか」である。調査は協力企業経営者と従業員391人に対してWeb上で実施した。109人（回答率27.9%）のサンプルを得た。仮説1は総ストレス反応を従業員数の大小で比較した。5%水準で小さな効果差が見られた。仮説2はストレス反応を従属変数とし、仕事負担と仕事資源を構成するいくつかの因子を組合せ独立変数として影響を分析した。結果として感情負担がストレス反応に影響することがわかった。中小企業では組織と個人の関係性が変化しており、職務要求や裁量度より感情負担が働きやすさに影響する可能性が考察できた。

➤饗庭 一輝

題目：メタファーがカウンセリングに及ぼす影響

要約：メタファーとカウンセリングの関わりは深い。遠山（1995）は、治療的場面におけるメタファーの機能を間接性、創造性、明示性と指摘した。また、近年隆盛している関係フレーム理論においても、メタファーはその理論の根幹をなすとされている。しかしながら、カウンセリングにおけるメタファーの効果は理論の提唱や経験則で行われており、量的なアプローチからメタファーの効果を検証する試みは見られなかった。

そこで本研究は「メタファーがカウンセリングに影響を及ぼしていること」を検証すること、またその過程で「メタファーが持つ効果について量的なアプローチから検証すること」を目的とした。

本研究では、対人不安を抱える大学生を想定した仮想カウンセリング場面を設け、教示にメタファーを用いた群を実験群、メタファーを用いなかった群を統制群とした。両群における質問項目評価の比較をマン=ホイットニーの U 検定を用いて中央値比較を行った。その結果、有意差が見られた項目があり、メタファーがカウンセリングに影響を及ぼしている可能性が示唆された。また、有意差が見られなかった項目についても効果量が確認され、メタファーがカウンセリングに及ぼす影響について示唆された。また、量的なアプローチから、有意差と効果量が確認されたことによりメタファーが持つ効果について量的なアプローチから検証することの可能性が示唆された。

➤有田 真由

題目：乳がん患者におけるアピアランスケアの可能性 —がん治療に伴う外見の変化と QOL との関連—

要約：本研究の目的は、乳がん患者へのアピアランスケアにおける心理職の役割とその可能性を検討することである。そのために、乳がん患者のアピアランスに関する現状を把握し、アピアランスの各症状やそれに伴う苦痛度、アピアランスに伴う日常生活場面の苦痛度と QOL との関連性を検討した。本研究では、初発で現在治療中の乳がん患者 103 名を対象に質問紙調査を実施した。特に、筆者が独自に作成した「アピアランスに伴う日常生活の苦痛尺度」の因子分析の結果、“自己の喪失”“社会・他者との関係の変化”の 2 因子が抽出され、これらには、日常生活上の問題に加えて、＜現実の自己への悲嘆＞＜役割の喪失＞＜関係性の喪失＞＜罪責意識＞といった実存的問題も含まれていることが明らかとなった。次に、アピアランスに関する症状の程度と苦痛度および「アピアランスに伴う日常生活の苦痛尺度」の各下位尺度と、全人的 QOL(QOL「FACT-B」,スピリチュアル QOL「FACT-Sp」)との相関係数を算出した。その結果、アピアランスに関する症状による苦痛が強いほど、“自己の喪失”“社会・他者との関係の変化”の日常生活における苦痛度が高まり、“身体症状”“精神的状態”と“活動状況”に関する QOL が低下することが示された。さらに、アピアランスの症状の中でも、“乳房の喪失または変形”と“傷跡”への苦痛度が高いほど、スピリチュアル QOL も低いことが明らかとなった。以上の結果より、乳がん治療に伴うアピアランスケアとして、対人関係の喪失や外出に対する消極的態度といった心理社会的側面への支援が重要であることが示唆された。加えて、その背後にある実存的問題へのアプローチが、患者の生きがいや安らぎ、人生観の深まりといったスピリチュアル QOL 向上にもつながる可能性があると考えられる。また、多職種との連携だけではなく、頭髪やまつ毛・眉毛の脱毛等には美容師やメイクアップアーティストといった病院外の専

門職や地域との連携を図ることも重要であると考え。

➤安在 侑輝

題目：子育てが女性の生き方に与える影響 ―母親役割と母親以外の役割に着目して―

要約：本研究は女性が母親となる過程での「個人としての自分」に焦点を当てたものである。本研究では「個人としての自分」を子どもが生まれる前の自分と社会で働くといった母親以外の一面、それら両方の意味を持つ言葉として「個人としての自分」という言葉を使用した。「個人としての自分」は育児ストレス（小野田・2013）や育児不安（原口・松浦・矢倉・佐々木・笠岡・2005）に影響を及ぼすことが先行研究により明らかになっている。本研究では女性が母親となる過程での「個人としての自分」がどのように存在するのか、また、「個人としての自分」と「母親としての自分」の関係性について考察することを目的としてインタビュー調査を行った。インタビュー調査は、インタビューリストを作成し、それに基づいた半構造化面接を実施した。大倉（2002：2011）の語り合い法を参考にインタビューの実施、検討を行った。インタビューの結果および考察を簡単に下記にまとめる。

『A自身の母親の影響』や『世間から向けられる母親像』の2点が、『母親が自分の人生を生きる、選択する』ことの障壁として存在した。それを乗り越えることに寄与したのは『母親との関係の捉え方の変容』を通じた自己受容だと考えられる。障壁を乗り越え『自分の人生を生きる、選択する』ことで『自分の母親像の確立』が達成された。これらのプロセスは『母親としての自分』が母親になることで別個のものとして生まれてくるものではなく、『個人としての自分』に新しく母親という役割が取り入れられていく過程の1つであると考えられる。

➤安藤 誠尊

題目：中学校内居場所への心理的考察

要約：不登校児への支援として、フリースクールや適応指導教室など学校外での取り組みについては選択肢が増えているものの、それらは不登校になった後の支援でしかない。学校内で利用できる支援としては、保健室や相談室があるが、利用目的が決まっているため、特別な目的を持たない生徒にとっては利用しやすい場所とは言えない。支援ニーズが明確

でなくても誰でも受け入れる、また、学校への適応を求めない場所として、学校内居場所をつくる取り組みがはじまっている。本調査研究では、学校内居場所の効果と課題について整理することを目的とした。筆者がボランティアスタッフとして関わる中学校内居場所をフィールドとし、そこを利用する生徒との関わりを通して、生徒たちが体験した中学校内居場所での活動に参加し、彼らに与える影響について、心理学的な考察を行った。本調査は関与観察を基本とし、データ収集についてはエピソード記述を採用した。ボランティアスタッフとして、生徒との関わりから、中学校内居場所の効果と課題を整理するにはエピソード記述が有効であると考えた。中学生4名との関わり体験を取り上げ、それぞれのエピソードを示し、考察を行った。エピソード中では、対象者自身が受容されることにより、自分の居場所を見つけていく体験。中々言えず抱えていた不安を打ち明ける体験。吐き出した不満を筆者が受容して代わりに言葉にすることで、言葉として気持ちの表現を認識する体験などが語られた。中学校内居場所での支援ニーズが明確ではないとされていたが、エピソードからは、不満や不安を抱えた対象者たちが、受容されることにより新たに自分の居場所として機能していくことが分かった。

#### ➤井戸田 芽具

題目：時間的展望に及ぼす親の養育態度およびゲーム教材による介入の効果

要約：本研究は、大学生を対象に、将来へのとらえ方や満足度である時間的展望に対して、親の養育態度およびゲーム教材を用いた介入の効果を検討したものである。

研究Ⅰにおいては、大学生を対象に時間的展望尺度（白井, 1994；奥田, 2008）および親の養育態度尺度（小川, 1991）を用いた質問紙調査が行われた。その結果、時間的展望と親の養育態度の愛情・共感を示す養護因子との間に正の相関が、過保護・過干渉を示す過保護因子との間に負の相関関係が認められた。また、親の養育態度の2因子に基づく4類型による分析からは、母親の養育態度と過去および現在の時間的展望との間に、父親の養育態度との間には、過去および未来への時間的展望との間に関連があることが示唆された。

研究Ⅱにおいては、大学生14名を対象に福山・森田（2024）の開発した「かってにハッピーエンドゲーム」を実施し、その前後の時間的展望尺度および親の養育態度尺度の得点を比較した。その結果、白井（1994）の尺度の「現在の充実感」因子および奥田（2008）の「未来」の満足度における得点の増加に有意傾向がみられた。また、母親の養育態度の

過保護因子に有意な減少が見られた。さらに、ゲーム実施後の質問紙の自由記述欄には、このゲームが「楽しかった」や「将来に向けて不安が減った」等の主旨の記述が、ほとんどすべての参加者に見られ、このゲームが大学生の時間的展望にポジティブな影響を与える可能性が示唆された。

以上の結果より、今後も大学生の時間的展望に影響を与える要因や、その改善のための具体的支援方法の実証的研究が必要であることなどが考察された。特に、ゲームによる介入効果については、ゲームに含まれるどのような要因が重要であるのかについてや、効果にどれほどの持続性があるのか、もし一時的であるならば、効果を持続させるためにどのような付加的な介入が必要かなどについて実証的研究が必要であることが指摘された。

➤宇賀 万由加

題目：女子学生におけるネガティブライフイベントがもたらす反すうおよび抑うつへの影響－保護要因とアタッチメントの媒介の視点から－

要約：2020年、拡大した新型コロナウイルスにより、私たちはさまざまな心理的影響を受けた。女子大学生を対象とした調査では、コロナ禍において抑うつが有意に高まっていることが示されている(松本, 2022)。先行研究では、ネガティブな出来事を経験した後、人々は他者と感情を共有せず、社会的支援によるネガティブ感情の処理が遅れ、ネガティブ思考をくり返す反すうが定着すると考えられている。そこで、本研究は、ネガティブな出来事がうつ状態を導くプロセスにおいて、その保護要因として子ども期の保護的体験(Benevolent childhood experiences : BCE)に着目した。これは子ども期に受けた支援的で有益な体験を指し、ネガティブな出来事への耐性を高め、心理的健康を守るための回復力を育むとされている(Narayan et al., 2018)。そのため、BCEを多く経験した人々は、ネガティブな出来事に遭遇した際、反すうが生じても、自らのリソースを活かした対処ができる可能性が高まる。親子の関わりによって形成されるアタッチメントもまた、感情の調整や社会的な適応に重要な要因であり、予期しないネガティブな出来事に直面した際にも、精神的健康を保つ力を持ちやすいと考えられる。本研究は、女子大学生を対象に、ネガティブライフイベント「NLE」を体験する場合に、「考え込み」と「反省的熟考」(反すう)、BCE、「不安」と「回避」(アタッチメント)及びアタッチメント安定が、どのように関連し合ってメンタルヘルスに影響を及ぼしているのかを検討した。その

結果、これまでに明かされている反すうや NLE とのメンタルヘルス不全との関連が示された。また、本研究では反すうの「考え込み」が NLE と抑うつとの間に関連を媒介するコーピングとして捉えることができ、反すうの緩和要因について明らかにすることは今後の研究の課題といえるだろう。

➤岡崎 大斗

題目：心理療法において立ち現れる幽霊・お化けイメージの意義に関する心理臨床学研究

要約：心理療法過程において、クライアントから幽霊・お化けという異界イメージの表現がしばしば現れることがある。そういった心理療法において現れる幽霊・お化けイメージは一体どのような役割を果たすのか。そういったイメージをどのように受け取り、その個人のこころの癒しにつなげていくことができるだろうか。このような問題に多少なりとも迫ることが本研究の主たる目的である。そのために、本研究では、幽霊やお化けのイメージが現れた心理療法事例を提示し、そういった異界由来のイメージとその変容によってもたらされるこころの癒しの可能性について検討する。

本研究の考察として、幽霊やお化けという異界イメージには、様々な水準があり、個人的な水準と個人を越えた集合的な水準に大別されるということが示された。また、そういった観点を持ちながら面接を進めていく中で、自分という存在全体を包み込む母なるモノのイメージが布置する可能性についても示唆された。クライアントが様々な表現する異界の住人イメージに対してセラピストが、個人的な水準のみならず、個人を越えた集合的な水準にも開かれていることが、クライアントのこころの変容、あるいは癒しをもたらすことが考察された。最後に今後の課題として、たゆまぬ心理臨床実践のなかで、一事例のみならず、様々な事例との出会いを通して日々検証、再考していく必要性が示された。

➤桑野 千星

題目：ネガティブな印象を与える自己呈示が表す間接的な援助希求について—受け取り手の視点に立って—

要約：自殺対策として援助希求の促進が掲げられており、先行研究も数多くある。援助希求の中で、他者操作的であるネガティブな自己呈示による間接的な援助希求がある。この

援助希求は、受け取り手の陰性感情を引き起こす。その結果、疲弊したり、為し手と受け取り手の関係が破綻したりする。そのため、援助希求の促進が必ずしも良い結果をもたらすとは限らない。本論文では、『こころのケア』に注目し、不適切で他者依存的とされるネガティブな自己呈示による間接的な援助希求について検討し、関係が破綻せず、関係を維持できるやりとりの特徴を知ることが目的とした。この研究において、個人に合った対応が必要であると考え、インタビューリストに基づいた半構造化面接を実施した。面接から、①対人関係について、②ストレスの発散、③話の聞き方、④受け取り手の自己肯定感、が特徴として挙げられた。面接を通して、関係を維持しているのではなく、変容させて相手にあった関わり方を見つけていることが分かった。東畑（2024）や松本（2021）の研究で、依存は本質的な営みで、対人関係において必要なものであることが述べられている。関わりを変容させて適切な距離感を保つのは、負担の少ない依存関係を築き、お互いの健康を守るために良い働きをしていると考えられた。本研究は日常的な相談や援助についてのより臨床実践に繋がる知見を提供しうるものである。また、自殺予防としての援助希求促進の観点からは、日常的なケアによる、日常的な自殺予防を示唆するものとなる。しかし、1人の事例をもとに書いた論文であるため、想定しうる多様な場面の一部を切り取ったにすぎない。しかし、援助希求の論文の課題として“個別の対応”が掲げられていることが多いため、事例研究を蓄積していくことが求められる。

➤富美 司

題目：Positive Solitude がもたらす時間管理と自己決定が大学生活の主観的幸福感に及ぼす影響

要約：孤独は一般的にネガティブなイメージとして用いられることが多い。しかし、1人で過ごすことで自分の考えを整理でき、将来の社会的な出会いに備えることができることや、社会的なストレスからの解放などのポジティブなものとしても注目されている。Positive Solitude もポジティブな孤独の1つとされている。Positive Solitude は、「1人である時間」あるいは「自分時間」とされ、自らが選択を行い、経験として楽しんでいる時間と考えることができる。Positive Solitude は老年期において重要だとされているが、青年期にあたる大学生においても、履修登録や就職活動など、中学校、高等学校に比べて自己責任による選択が迫られるため、Positive Solitude の能力は必要であると考えられる。

そこで大学生における Positive Solitude が主観的幸福感、時間管理、自己決定に関連しあうのかを検討すべく本研究を実施した。結果として、Positive Solitude は主観的幸福感、時間管理、自己決定と関連することが分かった。先行研究で成人を対象とした調査の中でも Positive Solitude と幸福感や精神的健康の間には正の相関が示されていた。これらのことから大学生に限定しても関係性があるということが示された。また、愛着スタイルによって Positive Solitude を影響し、その影響は、自己決定を通じて説明されることも分かった。Positive Solitude の時間を、個人的な成果を実現するために使っていること、自己決定には、自分で人生を選択することで、選択する行動への動機づけが高まることが示唆されていることから自己決定が影響を及ぼす要因になっていると考えられる。今後の展望として、Positive Solitude は変動のある能力とされているが、日本での研究はまだ少ない。そのため、縦断的にアンケートを取りより正確に Positive Solitude について理解を深める必要がある。